平成６年６月25日発行（毎月１回25日発行）（通巻309号）　昭和51年７月７日第３種郵便物認可

文化庁月報

特集
全国高等学校総合文化祭

文化庁／編集

平成６年６月　No.309

ぎょうせい・刊

昭和五十一年七月七日第三種郵便物認可
平成六年五月二十五日発行（毎月一回二十五日発行）

文化庁月報　五月号　（通巻三〇八号）

定価五三〇円（本体五一五）〒七六円
年間購読料　六、三六〇円（税込）

CONTENTS

文化庁月報

1994 6 No.309

特集●全国高等学校総合文化祭

全国高等学校総合文化祭 4
高校生文化活動の現状と将来展望 太田原弘 6
高等学校文化連盟と全国高等学校総合文化祭 後藤政雄 9
第17回全国高総文祭埼玉大会を振り返って 松木晴信 11
文化そして交流の場としてのかるた 阿久津晴夫 13
たくさんの人に支えられて 藤木恵津子 14
愛媛大会の概要 愛媛県実行委員会事務局 16
全国高総文祭優秀校東京公演の概要 地域文化振興室 19

都道府県のページ

ご存じですか？ こんな文化財⑫
中尊寺金色堂、大型土偶頭部他 22
一度は行きたい博物館・美術館⑭
広島県立歴史博物館 25

法人紹介〜文化に息吹を〜

芸術文化と科学技術の調和と発展に寄与
㈳私的録音補償金管理協会 28

人間国宝を訪ねて①

志村ふくみ（紬織） 聞き手／高田都耶子 30

ACA[Agency for Cultural Affairs]NEWS

・平成６年春の褒章受章者決まる ……34
・平成６年春の勲章受章者決まる ……34
・重要文化財の新指定（美術工芸品関係―２）……35
・芸術文化助成財団の助成活動 ……43

●文化庁施策Ｑ＆Ａ ……33
●著作権法利用講座⑮ ……32
●芸術文化振興基金ニュース ……46
●今月の国立劇場 ……47
●編集後記 ……48

ちょっと一息

落書きと歴史／石澤良昭 ……20

イベント案内

インドの仏像とヒンドゥーの神々／京都国立博物館 ……45

〈表紙写真〉
第17回全国高等学校総合文化祭埼玉大会開会式
（大宮ソニックシティ）

特集

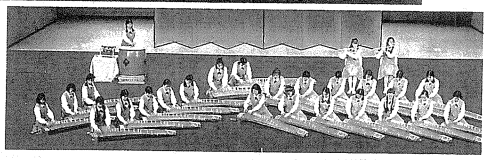
全国高等学校総合文化祭

全国高等学校総合文化祭は、全国の高校生による芸術文化活動の発表会を総合的に開催し、創造活動の向上を図るとともに相互の交流を深めることをねらいとして、昭和52年度以降、各都道府県持ち回りで開催している高校生の文化の祭典である。

この文化祭は、第１回の千葉県大会を皮切りに、回を重ねるごとに充実が図られ、開始当初と比較して種目数や参加校数などが大きく増加するなど、文化活動を行っている全国の高校生に確実に定着してきている。平成６年度には「そこに新しい君が見えるように'94愛媛」をテーマに、８月の５日間にわたり、文化庁、全国高等学校文化連盟及び愛媛県教育委員会等の共催により、愛媛県で第18回大会を開催する。

また、平成２年度からは、この全国高等学校総合文化祭で選ばれた優秀校による全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演が国立劇場で開催されている。

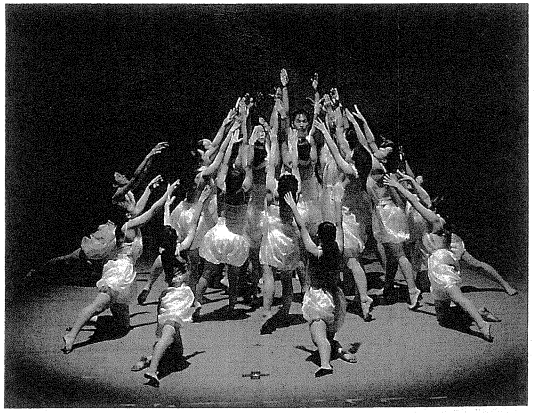
第１回、千葉大会（一九七七年）



埼玉大会、各分野の発表のようす

千葉大会ポスター（制作／縄野秀忠）

第17回、埼玉大会美術展（1993年）



高校生文化活動の現状と将来展望

全国高等学校文化連盟会長
（岩手県立盛岡第四高等学校長）
太田原　弘

我が国が、世界有数の「経済大国」であり、同時に「援助大国」ともなってきていることは、ＯＤＡ（政府開発援助）の状況等からも明らかであり、国際的に重要な役割を果たしていることについて、もはや疑う余地がない。

二十一世紀以降には、経済面のみならず、文化的な分野においても、歴史と伝統の豊かな文化国家日本として、国際的視野において積極的な役割を果たすべきことが、一層強く求められているといえよう。

また、現代は、諸々のニュースが瞬時にして世界を駆け巡る「情報化の時代」、また、人生八十年の「高齢化社会」でもあり、こうした激しい時代の変化を生き抜くためには、「たくましさ」とともに「心豊かな人間性の醸成」が、おのずと強く望まれてくる。従って、目前に迫っている二十一世紀に向けて、「みずみずしい感性」や「感動する心」を育てる文化活動の果たす役割は、ますます大きいものとなってこよう。

さて、一概に「高校生の文化活動」といっても範囲が非常に広く、専門家から直々にレッスンを受けてプロの道を目指すプロの卵から、部活動に励んで相当程度に熟達する生徒、必修クラブで趣味程度に余暇を楽しむ生徒に至るまでさまざまである。

こうした高校生の文化活動の現状について触れてみると、現代の高校生の興味・関心は驚くほど多様性に富んでいるので、文化部の種類も多く、書道・美術工芸・合唱・演劇・吹奏楽・写真・放送・文芸・新聞などのほか、器楽・管弦楽・マーチングバンド・バトントワリング・自然科学・弁論・ユネスコ・ＪＲＣ・インターアクトあり、一方、伝統芸能たる日本音楽・郷土芸能・吟詠剣詩舞・茶道・生け花のほか、競技を伴う囲碁・将棋・小倉百人一首かるた等々、実に多種多様である。時代の流れを反映して漫画や映像関係も増えてきている状況にある。

次に、部活動に参加している生徒に眼を転ずれば、活動生徒の四分の三が運動部員だとすれば、文化部の生徒の割合は、およそ四分の一ぐらいである。男子部員が少ないことがどこの学校でも共通の悩みと言えよう。

一方、活動時間についてみると、吹奏楽部や演劇部などの、熱心に活動している部の場合は、運動部なみの活動時間という状況から、部活動は必修クラブ一時間だけ、といった類まで、さまざまである。

施設・設備についてみると、運動部に比べて文化部の部室は十分でない場合が多い。恵まれた都道府県ではホールやギャラリーをもつ文化館が設置されていたり、また、文化部施設整備事業によって吹奏楽の練習もできる文化部の部室をつくっている都道府県もある。しかし、総じて、ほとんどの文化部は放課後に教室を使用しているのが実状である。

次に指導者についてみると、指導者には、生徒の個性や独創性、内に秘めたる〝隠れた才能〟を引き出す資質が求められる。専任の指導者をもっていることが多い芸術科の書道・美術・合唱・吹奏楽の場合は比較的に恵まれているが、その他については、指導者講習会等によって、必要な指導力の養成に努めている場合が多く、各都道府県とも、技術講習会や研修会と銘打って生徒・教師ともども参加して研鑽を積んでいるところが多く、日本音楽や郷土芸能の場合は、地域の人々に指導を依頼せざるをえない状況にある場合が多い。従って、指導者の養成は、文化部活動における生徒育成の基本であり、急務でもある。

鑑賞の機会は「芸術鑑賞の時間」として学校行事に組み込まれているところが多い。県によっては「文化教室」として全県的に取り組んでいるところもあり、また、文化振興財団の「青少年育成事業」として位置づけられているところもある。

発表の機会としては、従来から各学校において文化祭の中に組み込まれている場合が多いが、近年、学校祭はテレビ等マスコミの影響もあり、遊びの要素が多くなり、文化部の発表会の色彩が薄れて来たことを、憂慮しつつ指摘する人も少なくない。

しかし近年、各都道府県とも「高等学校総合文化祭」を開催し、そこで推薦されたものが全国高等学校総合文化祭に出演・出品し、さらに、そこで選ばれたところが同優秀校東京公演に出演（国立劇場）する機会を得るという構図になってきており、高文連の果たす役割が年々大きくなってきている。そのような活動や晴れ舞台での演技・出品を起爆剤としながら、その他の各種大会にも積極的に参加し、それぞれの地域文化を盛り上げるエネルギーともなってきていることは、誠に喜ばしい限りである。

その全国高等学校総合文化祭は、昭和五十二年度の第一回の千葉大会を皮切りに、今年度の愛媛大会で第十八回を数え、総合開会式を含めて十数部門にわたって、毎年八月の上旬に一週間ほどの日程で開催されている。この大会は、高校生の日頃の文化活動の成果の発表と相互交流をねらいとした〝文化のインターハイ〟とでも称すべきものであり、全国から二千校・一万八千人の高校生が出品・出演し、観覧者も含めると十万人の人々が、全国の高校生の夢と情熱をかけた限りない可能性に挑戦する〝文化の祭典〟に結集する姿を満喫している。それぞれの

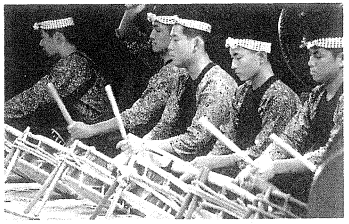
場において、ひたむきな若さあふれる演奏・演技に拍手を送り、お互いの交流を深めながら友情を育んでいる。

第十三回大会からは、東南アジア・中国・韓国・欧米の高校生との国際文化交流も含めて、国際色豊かなものとなり、全体の雰囲気を、いやがおうにも高めている。

一方、〝若者の感動の絶頂〟と表現する人がいるほどの、国立劇場の夏「全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演」も第五回を迎え、演劇・日本音楽・郷土芸能の三部門において優秀校各三校と部推薦二校が選ばれ、晴れの檜舞台において、みずみずしい感性・ほとばしる情熱の演技・演奏が繰り広げられ、その評価と期待が一段と高まってきていることは、誠に喜ばしい限りである。これらの活動を支えているのが各都道府県の高文連であり、全国高文連である。

現在、全国高文連は平成十一年の法人化に向けて財政基盤の確立のため、鋭意努力中である。

さて、高校生の文化活動の将来展望は、個々の生徒の、また、一人一人の教師・指導者の芸術文化に傾ける情熱と地道な努力を抜きにしては語れないであろう。従って、お互いに多様性と相手の存在を認めつつも、全国の高校生並びに関係者は、それぞれの力を結集してゆかなければならないであろう。全国高等学校総合文化祭が各県持ち回りで開催されることによって、それぞれの県の高総文祭がもたれる契機をつくり、一方、全国高文連が結成されることによって、各県の高文連が誕生したように、高文連の役割は、文化活動を通して世界に誇るべき日本伝統文化の継承者として、新しい文化を創造する担い手としての高校生を育成することにある。そして、創造する喜びや、美的な感性や感動する心に大きな価値を見いだす社会へと、世の中の文化度を高めて行くための原動力となれるような力を育てなければならない。



従って、できるだけ幅広く各分野の文化活動をフォローしながら、芸術鑑賞や発表・表現の資質を育てつつ、高校生の文化活動のさらなる活性化に向けて、お互いに切磋琢磨し合いたいものと思う。そのためには、活動の場としての施設・設備の充実や高校生の文化活動への財政的助成の拡大も考えてゆかなければならず、国や都道府県並びに市町村レベルも含めた、国民的課題として取り組まなければならない重要性を内包しているものと思う。

また、伝統文化の継承に力点をおく一方において、その時代における若者の特性、言わば「若者文化」にも理解を示す姿勢は大事なことであるが、このことについては、関係方面の意見を聴しながら考えて参りたい。

高等学校文化連盟と全国高等学校総合文化祭

全国高等学校文化連盟事務局長
（岩手県教育委員会文化課主任文化主査）
後藤　政雄

全国高等学校総合文化祭（以下全国高総文祭）は、スポーツでいえば、全国高等学校総合体育大会にあたるもので、最初は小規模なものであった。その始まりは次のような経緯であった。

昭和五十二年八月に千葉県で第六回全国高等学校演劇研究大会の開催が予定されていた。これに合唱・吹奏楽・邦楽などを併せて総合文化祭を開催してはどうかとの意向が文化庁から千葉県に伝えられた。千葉県ではこれを受けて、さらに吟詠剣詩舞・マーチングバンドを加え合計六部門で七月三十一日から八月三日までの四日間、千葉県文化会館等三会場で第一回全国高総文祭を開催した。準備する期間も数カ月で、大変な労苦を重ねて期待と不安のうちに全国高総文祭を迎えた。参加者は北は北海道から南は鹿児島まで二十五都道府県九十三校二千九百名を数え成功裡のうちに大会は終了した。十六年後にあたる昨年の埼玉大会は、十三部門に四十七都道府県二千校一万八千名で観覧者を含めると十万人を超えるまでに発展し、大規模なものに変貌を遂げた。

まさしく芸術文化のインターハイと称するにふさわしく全国各地の高校生が一堂に会して日頃の成果を発表し、相互の交流を深めている。国内の高校生だけでなく、第十三回からは国際文化交流事業として海外の高校生との交流も始まった。

全国高総文祭の主催者は開催県及び県教育委員会が中心となって出発したが、その後、新たに発足した全国高等学校文化連盟（全国高文連）が中心となって取り組んでいる。運営組織は開催県に実行委員会事務局が開催二年前頃に設置され開催準備に当たっている。

出品・出演校の選定は各ブロック大会で代表が決まる演劇部門を除き、各都道府県教育委員会に依頼している。出品・出演資格は、現在は高文連に加盟していることが条件である。ただし、平成二年度から始まった全国高総文祭優秀校東京公演（演劇・日本音楽・郷土芸能の三部門）の出演校の選考基準は各学校合同は認めず単一校となっている。

実施部門は、第二回（兵庫）からは美術工芸・書道部門が加わり、第三回（大分）を経て、第四回（石川）からは写真部門が加わり、第五回（秋田）から吹奏楽部門に器楽・管弦楽も入り、郷土芸能部門が加わった。第六回（栃木）・第七回（山口）・第八回（岐阜）を経て、第九回（岩手）に至り特別に文芸が加わったが、この後文芸は協賛部門に止まっている。第十回（大阪）からは吹奏楽部門と器楽

管弦楽部門が二部門に分かれ、特別に映像部門が設けられた。第十一回（愛知）からは放送文化が入り十二部門となった。第十二回（熊本）を経て第十三回（岡山）では特別にダンス部門も設けられた。第十四回（山梨）・第十五回（香川）・本土復帰二十周年を記念して開催された第十六回（沖縄）・第十七回（埼玉）を経て今年の第十八回（愛媛）は十五部門と十一の協賛部門で八月四日から八日まで松山市を中心として四市一町で開催される。

開催地は各都道府県持ち回りとなっている。初めは参加都道府県の代表者会議によって決められていた次期開催地は、全国高文連発足後はその評議員会によって内定し文化庁で決定するようになったが、開催希望が相次ぎ現在では基準が示され、日本を三分し東地域・中地域・西地域の輪番となっている。

全国高総文祭開催の主な成果としては全国の高いレベルの芸術文化活動にふれ啓発しあい、国際交流も含めて相互交流がなされること、生徒と教師が共通の感動体験を持つことにより相互の深い信頼関係を築くことなどが挙げられる。その他、波及効果は測り知れないものがあり、直接的には、開催県の県高総文祭開催の契機をつくり、新たに各部門が整えられ、県高文連の発足を促した。そして組織や財政基盤が確立される方向へと向かった。また、参加各県にも同様の刺激を与えた。

その全国高文連の結成に向けての具体的な始動は、全国都道府県高等学校文化連盟等連絡協議会が第四回（石川）開催中の昭和五十五年八月に開かれたことであった。その後、第九回（岩手）開催後、昭和六十一年二月に東京の青山会館で全国高等学校文化連盟設立総会が開催され、事務局を岩手県教育委員会事務局文化課に置き、事務局設置県である岩手県高文連会長石川邦夫氏が全国高文連会長に選任された。ここに、「高等学校における生徒の創造活動の向上充実を図り、文化活動の健全な発展と芸術文化の振興に資する」ことを目的として全国高等学校文化連盟が結成された。平成二年二月に四十七都道府県高文連の全加盟が達成された。高文連の組織は四十七都道府県高文連と十六専門部で構成されている。主な事業に全国高総文祭・同優秀校東京公演・国際文化交流事業・文芸コンクール・研究大会等がある。

現在、全国高文連の法人化が平成十一年に向けて進められている。このことによって財政基盤を確立し、各種事業の充実・専門部の拡充・事務局の整備を期することを狙っている。

全国高文連が名実ともに全国組織として主導的役割を果たすには、なによりも財政基盤の確立が急務である。そのためには、法人化を達成することはもちろんであるが、各都道府県高文連の組織の整備と高文連会費の増額や各都道府県からの財政的助成の拡大を図ることが必要である。施設・設備では文化館が設置されている県もあり、文化部施設整備事業がなされているところもある。高文連に対しての補助事業や委託事業等には、各都道府県高総文祭補助・全国高総文祭派遣補助・文化部活動育成事業（技術講習会）・鑑賞教室補助・国際文化交流事業などがある。将来の地域文化の担い手としての高校生の文化活動の支援を仰ぐ努力を続けてゆかなければならない。

時あたかも、高校教育改革が叫ばれている昨今である。新学習指導要領には、心豊かな人間の育成や文化と伝統の尊重や国際理解などが掲げられている。現代は、「文化」の時代であり、「地方」の時代であり、「国際化」の時代である。全国高文連としては、二十一世紀の文化の発信者・受信者として、地域文化の担い手として、また、国際交流の実践者として育成すべく、高校生の文化活動の活性化に努めてゆきたい。

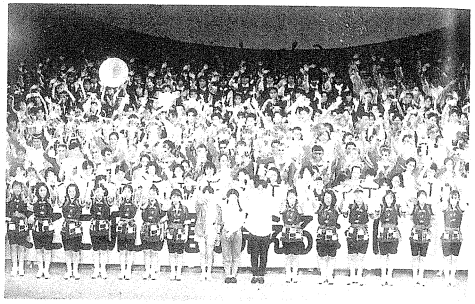
第17回全国高等学校総合文化祭
埼玉大会を振り返って

埼玉県教育局生涯学習部
生涯学習課主任社会教育主事
松木　晴信

第十七回全国高等学校総合文化祭埼玉大会から一年近くの時が流れた。

「創造の海　いま埼玉に現わる」をテーマに全国各地から、そして遠く海外からも高校生が参加。各会場に詰めかけた観客は六万六千人を超えた。

県内七市十三会場で華やかに、時には力強く、時には美しく、様々な感動を呼び起こしながら繰り広げられた五日間の高校生の芸術文化の祭典の日々は、準備に携わった私達にとっては、何か遠くなつかしいものとなった。



だが、埼玉大会に参加した県内の高校生達にとっては、ただ、なつかしい日々というだけでなく確実に大きな変化を経験した貴重な時間だったはずなのだ。

◇　裏方を支えた高校生は

準備をする側に回った生徒達は、最初は先生方の指導を受け、どことなく受け身で仕事をしていたが、次第に自分のことのように積極的に考えたり、働くようになっていった。

協賛部門が行われた埼玉県熊谷会館では、歓迎の挨拶にみえた熊谷市長さんが、「高校生がこんなに自主的にやるとは、素晴らしいことだ。」と言って、運営にあたっていた生徒達の活動ぶりを褒めてくださった。

この熊谷会場ばかりではなく受付から接待、進行まで、どこの会場でも、ほんとうに心くばりを忘れることなく、てきぱきと働く裏方の高校生の評判は高かった。

多くの関係者からそうした評価をいただいたことは、関係者としても嬉しいかぎりだ。

美術部門の記録集の中で、昼食係を務めた県立高等学校三年の石井夏絵さんは、

「係として大会に参加し、一つの仕事を作り上げる大変さを見たような気がします。私は、直接運営に関わったのではありませんが、他の係や先生方の御苦労を感じました。そのような陰の努力があってこそスムーズに動くことができ、成功につながるのだと思います。

多人数で動くと色々な問題や行き違いなどが出て来ますが、そういう事にたいしてどのように対処するのか、又、周囲を見渡すことがいかに大切なことかということを学びました。この大会は私にとって良い経験となりました。」

と感想を述べている。

仕事をすることで、いままで見えなかった周囲の人々の存在に気づくということも、貴重な経験だ。

機会に恵まれれば、高校生も素晴らしい力を発揮するのだと改めて思う。

◇　発表した高校生は

全国大会は会場なども平素の発表会場とは異なるため、舞台や会場も広く、予算的にもかなり恵まれた環境での発表となった。

総合開会式を行った大宮ソニックシティの大ホールや、吹奏楽部門の会場となった武蔵野音楽大学バッハザールをはじめ、客席が千人を超える大きな舞台での発表の機会は個人ではそうあるものではない。

日本音楽の部門に出演した星野女子高等学校三年の伊藤未架子さんは、

「演奏が終わり幕が下りた時、思わず涙がでました。ある時は鋭いしぶきを上げる激流を、ある時は優しく語りかけるようなせせらぎを思い浮かべながら演奏した『瀬音』。十九人の気持ちを一つにして弾くのは容易なことではありませんでしたが、精一杯心を込めて演奏し、練習の成果を十分に発揮した時のすばらしい感動を本番で味わうことができました。大切な思い出となったこの大会を支えてくださった皆様に深く感謝いたします。」

と大会を終えての感想を記している。

埼玉大会に向けて練習を始めてから終わるまでの間に最も成長し、感動や自信や新しい仲間など大きな財産を手にしたのは積極的に参加していった生徒達だ。

しかも四十数年に一度の全国高総文祭という劇的な場面でだ。

生徒達の様々な形での成長こそが全国大会の成果であり、大きな影響であるといえる。

◇　大会後の影響は

演劇部門では大会が終わり九月から平成五年度の地区発表会が始まり、十一月の中央発表会は、大変盛り上がった発表会になったとのこと。演ずるもの、観るものの意識に全国大会の影響があったのだろう。

年が変わりこの五月の中旬に行われた高等学校演劇連盟の総会（教師と生徒が参加する伝統）でも大勢が参加、立ち見に近い参加者で埋まり、生徒からも活発に意見が出され、同時に行われた研究会（素材上演もあった）も充実したものとなったという。

さらに春先から五月の連休近辺に行われる春季の発表会が今年から全県で行われるようになったことなど、少なからず埼玉大会は生徒や顧問の姿勢に影響を与えている。

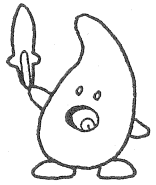
また、若い顧問の先生方の積極的な取り組みが目立っているという。

これは、全国大会まではと頑張って来たベテランの先生方から、若い先生方へのバトンタッチの契機となっているという見方もできるのではないだろうか。

そしてこれもまた、全国大会の影響のひとつといっていいのではないかと思う。

恐らく形が変わっても各部門ともこうした静かな動きの中で確実に全国大会の影響を受け、変化が始まっているはずだ。

昨年の大会の年がちょうど埼玉県高等学校文化連盟創立十周年の年であり、今年は本県の高校文化活動の振興の大きな節目である。そしてその充実発展のための環境の整備は行政としても大きな課題であることはいうまでもない。



埼玉大会マスコット「まが太郎君」

文化そして交流の場としてのかるた

―全国高等学校総合文化祭に新たに参加して―

小倉百人一首かるた部事務局長
神奈川県立市ヶ尾高等学校教諭
阿久津　晴夫

参加県は十八県で白熱した試合が行われた。名人戦やクイーン戦を見たことのある人なら「高校生もやるものだ。」と感心したにちがいない。しかし、朗詠した読手（どくしゅ）がかるたを経験したことのない素人の生徒であったことに気づいた人は何人いただろうか。

かるたはスポーツであるという人が多いし、また一秒の何十分の一かの瞬時に勝負が決まる競技だから、テレビの名人戦でもスローモーションで再現したりしている。

しかし、かるたはスポーツの面ばかり強調したのでは普及がおぼつかない。「とても自分には真似のできない競技だ。」と一般から遠ざかってしまうからである。

そこで私達はかるたを取らない生徒も参加できる、読手コンクール・小倉百人一首感想文コンクール・かるた文化研究コンクールを行い、広くかるたの理解者や愛好家を増やすことにしている。

第十七回全国高等学校総合文化祭では読手コンクールでの優秀者に朗詠をしてもらった。この試みは関係者には不満な人もいた。取り手の気持ちもわからないような素人に読手をさせるべきではないというのである。

しかし今回読手をつとめた四人の素晴らしい朗詠はかるた協会の役員達まで唸らせた。そして今年度以降もこの三コンクールは継続されることになったのである。

私達は、かるたは日本人だけでなく、外国人にも親しめる文化としての可能性を持っていると考えている。

それは私達の取り合っている札が定家の選んだ小倉百人一首だからである。人麿がいて赤人がいる。悲しいかな、わが国最大の詩人達はまだ外国人にはほとんど知られていない。が、私達の行っているかるたをゲームとしてこのままの形で外国に普及させることができれば、人麿や赤人を紹介することはもちろん外国人が和歌を朗詠し、天智天皇をはじめとする八人の天皇を詩人として外国に紹介することができるのである。これは紛れもなく第一級の日本伝統文化である。

「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶる

ことの弱りもぞする」の式子内親王の歌は「たま」という発音を聞けば下の句の「しのふることのよわりもそする」の札をお手つきをせずに取ることができる。「たまのおよ」まで聞いて取っているようでは遅いのである。

私達はかるたを三歳児に教えるとき、この札を猫のタマの目と教えている。つまり字札の「しのふることのよわりもそする」は「の」の字が二つ横に並んでいるので、「へのへのもへじ」の「の」、目玉に見えるからである。三歳児は「たま」を大学生より早く取る。

それを英語で解説してある英訳の小倉百人一首の本をいま作っている。

「高砂の尾上の桜咲きにけり」は「たか」という音を聞けば取れる。「た」のつく札は六枚あるが、はじめに「たか」と続く歌は百首中一首しかないからである。

英語で「tack a〜」というのは画鋲で止めるという意味である。「高砂の」の字札「とやまのかすみたたすもあらなむ」はまん中の行の一番上と下が「す」の文字になっている。「す」の丸まった部分を画鋲に見立てればタマの目と同じ理屈になる。もちろんこじつけであり、「高砂の」の「たか」と「tack a〜」の「タカ」ではアクセントもちがう。しかし人間である以上、それをかるたの「たか」と聞く耳は誰でも持っているはずである。そしてそういう耳を持つことこそが交流というのではないだろうか。

前に神奈川県の高校生大会にろう学校の生徒が参加して、耳の不自由なハンディを読話で補い、三人も優勝したことがある。外国人に読話でかるたをせよというのではない。多少のハンディは工夫によっていくらでも克服できるし、言語も環境もちがう外国人同志が文化交流をするのだから、その交流に多少の努力が必要なのは当然だと言いたいのである。

私達は誰でも参加できる交流の場としてのかるたをめざしている。二十一世紀には外国人が日本語で小倉百人一首を朗詠することもあるだろうとまじめに考えているのである。

外国に派遣される日本語教師に、茶道とか華道とか何か日本の伝統文化を体現できる人がどんどん行ける制度ができればいいと思っている。そして高等学校文化連盟が将来ユネスコの一翼を担い、世界高等学校文化連盟大会を開くような組織にならないものかと密かに期待している。

たくさんの人に支えられて

埼玉大会総合開会式生徒実行委員会委員長
埼玉県立川越女子高等学校３年
藤木　恵津子

「どこまでも広く、どこまでも深い創造の海、いま埼玉に現わる」

盛大な拍手の中、総合開会式の幕が降りました。そして長かった私の十六歳の夏が終わりました。

思いおこせば一年前――〈全国高等学校総合文化祭のことを何も知らずに委員長を引き受けてしまい、自分のことで精一杯でしたから、私が司会を務める話し合いが活発に進むわけもなく、そのまま六月のリハーサル大会を迎えてしまいました。

しかし、リハーサル大会を経てようやく自分の立場がきちんと自覚でき、今まで手探りだったことが見えてきました。また高校生の真剣な姿を見て、本番には全国、海外からたくさんの高校生が集まってくると思うと、委員長としての責任の重さを感じるとともに楽しみが増してきました。

本番三日前、一日中楽屋にこもって働いている方々の姿を目の当たりにして、ひどく心を打たれました。高校生の文化祭といっても舞台で華やかに映る高校生の陰では、先生方、スタッフの方々が舞台を支えていてくれる。でも高校生が主役なのだから、大人たちに負けてはいられない。私達はもっと頑張らなくては、と思いました。また、本番前日の緊張と忙しさの中でふと、自分が高校生でありながらも、高校生の力や可能性は計り知れないものがあるのではないかと感じました。

いよいよ本番。早く舞台に立って委員長としての役目を終わらせてしまいたいという気持ちと、文化祭が終わり実行委員会を解散するのは寂しいという気持ちが、頭の中を回っていました。

ついに舞台に立ち、「歓迎の言葉」の最後の一言を言い終えて、委員長として一番大切な仕事をやりとげた時は、満足感で一杯でした。まだ他の仕事が残っていましたが、とても気持ちが楽になりました。

舞台裏で働いていると、先生方と一緒に大会を動かしているという気がして、楽しくてなりませんでした。

あれから数か月が過ぎましたが、この文化祭での経験が私を変えたと思えてなりません。

大宮ソニックシティロビーの広告

積極性や主体性がなかった私が委員長になってしまったために、たくさんの方々に迷惑をかけましたが、委員長をやって自分から積極的に動けるようになり、自信を持てるようになりました。やればできるということを言葉だけでなく、体で感じることができました。

また、裏方と出演者、全く立場が違う役を同時にさせていただいたことが、とても貴重な経験となりました。裏方として仕事をしたからこそ、舞台に立った時に今まで見えなかった人達の姿が見えたのだと思います。公欠の時にノートを取っておいてくれたり、忙しいときに励ましてくれた友達、どうしていいかわからず悩んでいた時に相談にのってくださった先生。たくさんの人に支えられ、人の優しさや温かさを感じ、大変だったけれど、とても楽しく充実していて、文化祭に参加してよかったと思っています。この気持ちはどんな形で参加しても皆同じだと思います。あのとき私達と一緒に「創造の海」を作った仲間達は、いま全国、世界各地で文化祭の思い出を胸に、新たな目標に向かって練習に励んでいることでしょう。

今年の愛媛大会でも、一人でも多くの高校生にあの感動を味わってほしいと思います。

愛媛大会の概要

第十八回全国高等学校総合文化祭（以下全国高総文祭）は、平成六年八月四日（木）から八日（月）までの五日間、文化庁、全国高等学校文化連盟（高文連）、愛媛県、愛媛県教育委員会などの共催により、愛媛県内の四市一町の会場で開催される。

愛媛は、寛やかで広い瀬戸内海や宇和海に面し、温暖な気候にめぐまれた美しい所である。また、日本一の生産量・種類を誇る柑橘類や真珠など、豊かな自然の恩恵を受けている。

今年百周年記念を迎えた道後温泉は、全国的にも有名であり、古くは聖徳太子も訪れたといわれている。また、愛媛県は正岡子規をはじめ多くの俳人を輩出するなど、豊かな文化を育んできた。瀬戸大橋の開通で、全国から訪れる人も増え、愛媛の生活文化の活性化が進んでいるとき、第十八回全国高総文祭愛媛大会が開催されることは意義深い。

この祭典は、文化のインターハイともいわれ、全国から集まった高校生が芸術文化活動を総合的に発表するものである。

この第十八回大会は、「そこに新しい君が見えるように'94愛媛」（過去最高の一万五千点応募の中より選定）の大会標語をメインテーマに開催されるが、今年から、囲碁部門を加えた十八部門となり、約二千校から一万八千人の参加が見込まれていて、部門数・参加者数ともに過去最高となる予定である。

開催にあたっての基本方針は、文化庁や全国高文連と連携をとりながら、次の大きな三本柱を掲げた。

一、愛媛県下のすべての高校生が参加し、創造する文化祭にする。

——県下のすべての高校生が、標語やマスコットキャラクター、ポスターに応募したり、出演者やボランティア、観覧者として積極的に参加する。

二、県下各地で開催し、全県的な大会にする。

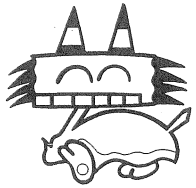
——地域性を考慮しながら、県下各地で開催し、県民に高校生の文化活動の様子を紹介する。

三、愛媛のイメージアップを図る大会にする。

——各会場や駅に花飾りを作るなど、県外から参加する高校生を温かく迎えるとともに、愛媛の豊かな風土や文化を紹介するため、協賛事業などを行う。

次に、大会標語などを紹介する。

①大会標語「そこに新しい君が見えるように'94愛媛」は全国各地で文化活動に取り組む高校生が出会い、互いを高め合う場であるという全国高総文祭の特質を、若者らしい感性でよく表現している大会標語として、高く評価されている。



マスコットマーク「牛鬼くん」

愛媛大会ポスター

第18回全国高等学校総合文化祭

そこに新しい君が見えるように'94愛媛

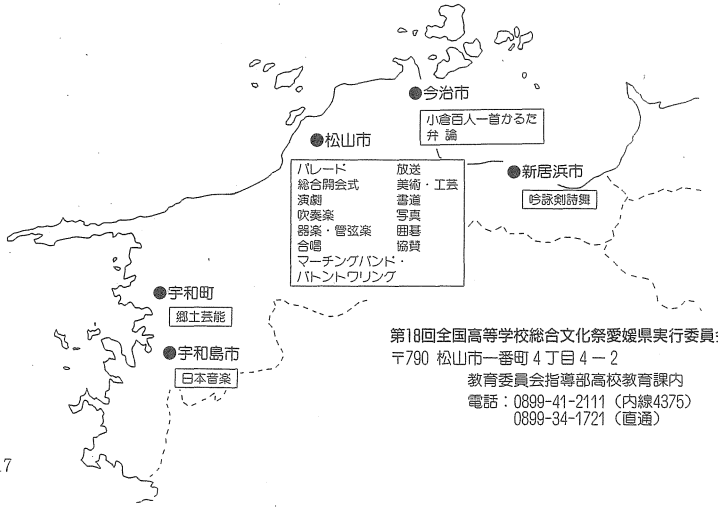
②マスコットキャラクター「牛鬼くん」はそのにこやかな笑顔に、県外からの参加者を温かく迎えようという気持ちがよく表れている。また親しみやすい上に、インパクトが強く、注目されやすい点からも好評である。

③大会ポスター図柄は愛媛の自然や風土をよく表すとともに、大会標語のイメージをよく伝えていて、若者の文化の祭典にふさわしく、清新であるとの高い評価を得ている。

さらに、開催事業及びその特色などを紹介する。

①総合開会式——大会初日、午後二時から、愛媛県県民文化会館メインホール（三千人収容）で開幕する。祭典全体の開会行事であるが、愛媛らしさをアピールするため、和・洋楽器の合同演奏やミュージカルへの挑戦をするなど、新しい趣向をまじえた愛媛独自の発表を考えている。さらに、愛媛

部門	開催会場		4日(木)	5日(金)	6日(土)	7日(日)	8日(月)
パレード	松山市街地 千舟町～大街道		18:00～19:30				
総合開会式	愛媛県県民文化会館 0899-23-5111	メインホール	14:00～16:40				
吹奏楽				10:00～17:00	10:00～17:00		
器楽・管弦楽						9:00～17:00	
合唱							9:00～17:00
放送		サブホール	←	9:00～17:00	→		
写真		真珠の間	←	9:00～17:00	→		
協賛 商業(販売)		県民プラザ	←	9:00～17:00	→		
協賛 将棋	松山市総合コミュニティセンター 0899-21-8222	大会議室		9:00～17:00			
協賛 農園芸・水産 機械・模型 被服・手芸 郷土研究 文芸、商業		体育館 0899-43-8188	←	9:00～17:00	→		
書道		企画展示ホール 0899-43-0393	←	9:00～17:00	→		
囲碁		大会議室				9:00～17:00	9:00～14:30
演劇	松山市民会館大ホール 0899-31-8181				← 9:30～17:00 →		
マーチングバンド バトントワリング	愛媛県総合運動公園体育館 0899-63-3211				9:00～17:00		
美術・工芸	愛媛県立美術館 0899-43-4258		←	10:00～18:00	→		
小倉百人一首かるた	今治市中央公民館第1・第2集会室 0898-32-2892			9:00～17:30	9:00～15:30		
弁論	今治市公会堂ホール 0898-32-5200						9:00～18:00
日本音楽	南予文化会館大ホール 0895-24-6800			9:30～17:30	9:30～14:30		
吟詠剣詩舞	新居浜市民文化センター大ホール 0897-33-2180			10:00～17:30			
郷土芸能	宇和町文化会館大ホール 0894-62-6111				8:30～18:00		



第18回全国高等学校総合文化祭愛媛県実行委員会
〒790 松山市一番町4丁目4－2
教育委員会指導部高校教育課内
電話：0899-41-2111（内線4375）
0899-34-1721（直通）

第18回全国高等学校総合文化祭

そこに新しい君が見えるように'94愛媛

の豊かな自然の迫力あるマルチスライドによる映像紹介なども計画しており印象が鮮烈で、スケールの大きなものになる予定である。

また、昨年度開催の埼玉県や来年度開催の新潟県の高校生も競演するとともに、韓国・イギリス、アメリカ、中国、インドネシア（予定）の高校生が国際色豊かな民族舞踊やジャズダンス等の華麗な演技を披露してくれる。

②パレード――総合開会式の後、松山市街地で、本県はもとより全国や世界各地から集まった郷土色、国際色あふれる踊りや、バトントワリング、マーチングバンドなど、総勢二千人の華麗で迫力あるパレードが繰り広げられる。

③演劇――全国の各ブロック予選で選ばれた代表によるコンクール形式の発表で、演劇のおもしろさの原点が満喫できる。四つの分科会に分かれた講習会もある。

④合唱――豊かな自然があふれる愛媛で、若い心をすがすがしい歌声に託し、「新しい君」へと誘ってくれる。

⑤吹奏楽――全国の若人が青春を音に託す。夢を求め、友を求め、感動を求め、若さあふれるエネルギッシュな演奏をお届けする。

⑥器楽・管弦楽――アンサンブル、ギター・マンドリン、ハンドベル、オーケストラなど、様々な編成による多彩な音色によるハーモニーの饗宴が、繰り広げられる。

⑦日本音楽――日本の伝統楽器である箏や尺八、三絃などを使った演奏や仕舞に、若者たちがチャレンジする。

⑧吟詠剣詩舞――漢詩、短歌、俳句などを吟じ、詠じ、舞ってみせる。郷土の文化や歴史を紹介する構成吟もある。

⑨郷土芸能――「いにしえ」から伝わる民族の技と心。高原の町、宇和町に全国の高校生が大集合。歌や踊り、太鼓の熱気ある舞台を、牛鬼くんと町花ひまわりがサポートする。

⑩マーチングバンド・バトントワリング――華麗なバトンさばきのテクニックと、迫力あるサウンドが、フロアいっぱいに繰り広げられ、全国レベルの若さがはじける。

⑪美術・工芸――県内外の作品展示はもちろん、県内作品の「青春を生きる」をテーマにした共同制作もある。交流会では商店街で、氷の彫刻にも挑戦する。

⑫書道――愛媛県内外の書道作品のほか、合同作品の陶板「俳句の都　愛媛」も展示し、交流会では、「砥部焼」の揮毫（きごう）にも取り組む。

⑬写真――全国の作品展示のほか、古い家並みの内子町八日市護国重要伝統的建造物群保存地区で、笹飾りをバックに、タイムスリップした撮影会を行う。

⑭放送――映像あり、音声あり、スライドあり。五部門に増え、色々な機器を使った若さあふれる発表が行われる。

⑮弁論――学校生活、友情、ボランティア活動、家族などさまざまなテーマの代表によるひたむきな熱弁が、感動を呼ぶ。

⑯小倉百人一首かるた――本大会で二回目の新しい部門。各都道府県代表チームによるリーグ戦とトーナメント戦の組み合わせで行う。

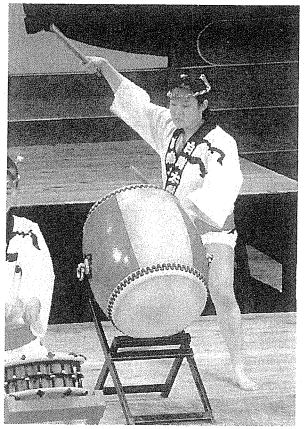
⑰協賛――将棋の開催をはじめ、県内の高校生による農園芸、水産、機械・模型、被服・手芸、郷土研究、文芸、商業の研究発表や展示。さらに県産品の販売実演や、正岡子規についての講演会、機械・模型のロボット実演など多くのイベントで楽しさ満喫。

⑱国際交流――全国高総文祭では、国際交流事業が併せて行われ、今回は前述の五か国約九十人の外国人生徒との交流が予定されている。大会参加のほか、県内各地で高校生や地域の人々とも交流を深める。

この夏、青い国、四国愛媛で、若人たちが文化や友情の輪を広げ、熱く燃える！

（愛媛県実行委員会事務局）

全国高等学校総合文化祭
優秀校東京公演の概要



（右）平成５年度優秀校演劇公演
アニータ・ロベールの「じゃがいもかあさん」
（千葉県立船橋二和高校）
（中）平成５年度優秀校郷土芸能公演
「白鷗太鼓」（都立白鷗高校）
（左）平成５年度ポスター

「発見　国立劇場の夏」をテーマに、平成二年八月二十五日国立劇場大劇場において、全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演（以下東京公演）の記念すべき第一回大会は開催された。

この東京公演は、高等学校文化連盟が毎年開催している全国高等学校総合文化祭（以下全国高総文祭）において発表していた全国都道府県代表の高校生徒による芸術文化活動の一層の奨励を図ることと、その成果を広く一般に公開することを趣旨とするものである。平成元年度に、全都道府県の全国高等学校文化連盟への参加が実現したことの記念という意味合いも込めて、全国高等学校文化連盟と東京都高等学校文化連盟が中心となって平成二年度から実施されることとなったものである。

当時、東京公演の開催について、マスコミが「文化の甲子園」と表現したように、全国高総文祭の「演劇」、「郷土芸能」、「日本音楽」の三部門に出演した全国の高等学校の中から、特に優秀であると推薦された各部門それぞれ四校以内の高校のみが、国立劇場の檜舞台に立つことができるということから、まさに芸術文化活動の甲子園といっても過言ではない。しかしコンクール形式をとらないため、甲子園のように、参加高校に順位をつけて表彰を行うことはない。

今年度の第五回東京公演は、八月二十七日（土）、二十八日（日）の二日間、「輝き　国立劇場の夏」のテーマのもと、国立劇場大劇場において開催され、第十八回全国高総文祭愛媛大会の出場校から推薦された、各部門の優秀校十二校が、競演することになる。この二日間で披露される各部門の演技、演奏からは、高校生の文化活動の水準の高さのみならず、我が国の芸術文化活動の将来の担い手としての姿も見出せるに違いない。

編集後記

「ジューン・ブライド」だからというわけでもないでしょうが、私のまわりでも、六月はやけに御結婚なさる方が多く、大変おめでたい限りです。お天気も新婚さんを祝福するかのように、真夏のような日々が続いていますが、そろそろ梅雨前線も近づいてきており、また今年もうっとおしい季節がやって来るのかと思うと、気が滅入るばかりです。こんな時こそ、元気を出して頑張りましょう。

さて、お恥ずかしながら、私は中学・高校とクラブ活動といえば運動部であったため、文部省に入省するまで全国高等学校総合文化祭の存在すら知りませんでした。もとより、文化はスポーツとは異なり、一定のルールの下に勝敗を競う性質のものではないわけですから、その総合的・全国的な大会があるなどとは夢にも思っていなかったわけです。それが今、改めて〝高総文祭〟なるものを勉強してみると、思いの外、素晴らしいものであることに驚くこととしきり。一度じかに見てみたいものです。

（栗）

文化庁月報　6月号（通巻309号）

平成6年6月25日印刷・発行

編　集－文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関3－2－2
発　行－株式会社ぎょうせい
本　社　〒104 東京都中央区銀座7-4-12
電話03(3571)2126
営業所　〒162 東京都新宿区西五軒町4-2
電話03(3268)2141（代表）
振替口座　00190-0-161
印刷所－㈱行政学会印刷所

定価530円（本体515円）送料76円
年間購読料6360円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合せ・申し込み先
㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(3269)4145（ダイヤルイン）

©1994 Printed in Japan

ISSN 0916－9849